

## 空の上で思ったこと

シビルNPO連携プラットフォーム理事  
 (一社)建設コンサルタンツ協会 顧問 酒井 利夫



先日札幌に出張する機会があった。羽田を離陸すると窓から見える景色は、臨海の工場地帯、ディズニーランド、都心部や幹線道路沿いの高層ビル群、そのまわりを隙間無く密集する住宅群と次々に流れて行き、さらに、市街地を縦横に連絡する道路網、河川や遊水地、集落や田畑がパッチワークの様に緑濃い山林ぎりぎりまで広がる。一見のどかで平和に見える風景が眼下を流れて行く。インフラも外見上は特段問題があるようには見えない。しかしそうだろうか？

今年は風水害、地震など例年になく災害が頻発し、特に雨の降り方も異常でその被害も激甚化している。「災害は日本中どこでも起こりうる」ということを、多くの国民が実感した。このように激甚化する災害に対して「今あるインフラは本当に大丈夫なのか」という懸念とともに、人間社会を支えるハードソフトの様々なインフラシステムが、いざという時にうまく機能しないのではないかと心配になってくる。

さらに、インフラそのものの「老朽化」が顕在化しつつある。日頃からしっかりと手当てしつつ、適切に更新して行くことが必要なはずであるが、一度作ったらそれで「以上終わり！」と思い込んでいた(?)この日本で、国や各管理者が遅ればせながらキチンと対応し始めていることを期待したいが、大丈夫だろうか。

この心配は公共的な施設だけでは無い。個人レベルの住宅やマンションでも、同じだ。住まいも適切な更新や世代交代がないと、いわゆる「空家問題」や「マンションのスラム化問題」もいよいよ「現実問題」となってきた。最近私自身、実家の現状を改めて認識し、この問題を他人事では無く、自らの問題として痛感しているところである。

生命体は、多少の破損は自ら修復できるが、それでも寿命はある。ましてや無機物はその劣化は不可逆的かつ加速度的に進行する。人間が適切に手を入れつつ寿命を伸ばしながらも、その更新をしっかりと考えないとどうなってしまうのであろうか。それも「いわゆるハード」だけでは無く、社会全体を支えるシステム全体も昔のままでいい訳ではあるまい。我々の世代で日本が終わるならともかく、これからもこの日本で我々の子孫が引続き暮らして行くのであれば、社会のハード及びソフトのシステムも「常に更新・進化させていくことが当たり前」、そしてそのことは「今生きている世代の責務」ということを常識とすべきではないか。もはや思考停止していることはできない。



機内から筆者が撮影したもの

そのような思いを巡らしていたら、気づけば北海道胆振付近上空だった。

